

環境先進国

ドイツから学ぶ

25

吉田 浩巳



前回に引き続き、水辺環境の保全で活動する自然保護団体について紹介します。さて、この団体が洗剤メーカーから寄付をもらうようになったいきさつは、

冬の突如、ドイツでもまれな木に登るカエルが現れ、これを観察した団体はカエルの保護を呼び掛けたそうです。

これに伝えるかのよう

に、カエルをトレードマー

がりました。

別のちょっと変わった取り組みもあります。コウノトリの生態を観察している方から、コウノトリがグーゼンハイムのゴミの埋め立て地でゴミをあさっていることを発見したのです。現在は、埋立地に生ゴミを処分することは法律で禁止されていますので、えきになる生ゴミはありません。そうなるコウノトリはえき

に見せてくれました。「今

までここにはこういう種類

のカエルはいなかったが、

今はこのように多くの種類

のたぐさんのカエルが生息

するようになり、本来の自

然が戻りつつある」と担当

者が話してくれました。

今度はしばらく河川沿い

を歩くと、NBUが自然保

護のため買収したという広

大な土地を紹介してくれま

した。生態系、あるいは自

然保護のために守っていく

べき場所であると判断すれば、積極的に買収して行く

そうです。

会員40万人のNPO③

土地買い取り自然保護

クにしている洗剤会社が名乗り出ました。双方が協議の上、カエルが住める池を作ることになり、この地域にこういう珍しいカエルが生息していることを幅広く知ってもらうことになり、しかもカエルの保護につな

に困り、飛び立てなくなるのではいかと推測し、その対策として環境NPOのNBUが乗り出しました。本来のコウノトリが飛来している場所を購入し、コウノトリのえき場を確保することにしました。購入地

は、本来のコウノトリのえきである毛虫も多く生息するようになり

買収した土地には「耳」、「目」、「鼻」の絵を描いた看板が建っており、意味を聞くと「耳」の看板あたりは、耳を澄ましてもらえば、昆虫の鳴き声を聞くことができます。「目」の看板のあたりは、よく見ると小さな虫もたくさん生息していることがよくわかります。「鼻」の看板のあたりは、さまざまな木々や花のにおいが感じ取れます。

かつて湿地帯があった場所ので、費用をかけて湿地帯を再生させる取り組みをしていることも紹介しました

このように五感を使って自然を感じ取ってほしいと話してくれました。ちなみにこの土地の買収価格を聞くと、場所によってもちろん価格は違いますが、この土地の買収単価は、1平方メートルあたり100円程度で、10万平方メートルを約1000万円で購入したそうです。



冬でも木に登ったり活動する珍しいカエルが生息する保護地について見学する筆者(後列正面)

ドイツ・マインツ州

(社団法人まちづくり国際交流センター理事長)

毎月第2、第4、第5

水曜日掲載